庄野潤三全集

庄野潤三全集　第六巻

昭和四十八年十二月四日　第一刷発行

著　者　庄野潤三
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番二一号　郵便番号一一二
電話　東京（〇三）九四五一一一一一（大代表）・振替　東京三九三〇
印刷所　図書印刷株式会社・株式会社興陽社
製本所　大製株式会社
製函所　株式会社岡山紙器所
定　価　一六〇〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©庄野潤三　昭和四十八年　Printed in Japan

0393-131962-2253 (0)　(文1)

庄野潤三全集　第六巻

目　次

流れ藻　7
〈丘の明り〉*　249
山高帽子　275
卵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

丘の明り　285
雉子の羽　307
庄野潤三ノート　阪田寛夫　592

装　幀・岩本正雄
口絵写真撮影・野上　透
（昭和48年4月、生田緑地にて）

庄野潤三全集　第六巻

流れ藻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一　あらし

田圃の中に建てたドライヴ・インなので、下がやわらかい。あとで沈んで来てはいけないから、土台を道路の端よりもいくぶん高くしてあった。

そのために少し勢いよく雨が降ると、道路との境の低くなったところに水が溢れて、たちまち川のようになる。

いまがそうであった。八月の下旬に入ったばかりだというのに、もう台風が上陸して、夕方からひどい吹き降りになった。

硝子戸をすっかりしめ切ったが、それでも隙間から水が浸入して来る。床の上の菓子の入った段ボールの箱をテーブルの上へ上げたり、濡らしてはいけないものを片附けながら、支配人の小木近雄はひとりで働いていたが、時々、外を覗いては、

「いやあ、凄いもんだな。うなぎか泥鰌でも泳いで来んかなあ」

と思わずひとりごとをいった。

中はかなりむし暑かった。ズボンひとつで上は裸になっている近雄の背中は、汗で光っていた。

従業員の女の子は、五人とも家に帰したし、調理場の小母さんも帰ってもらった。みんな地元の木更津の人であるが、家へ帰れなくなるといけないので、まだ雨が降り出さないうちに——四時ごろに帰して、あとに近雄だけ残った。

近雄の穿いているズボンは、アメリカ兵の中古の品である。もとの持主の名前が入っている。

四月に千葉の本社から赴任して来てすぐ木更津の町で上下揃いのを二着、買った。そうして、自分でそれを支配人の制服にした。

初めて会社が出したドライヴ・インで、支配人がどういう服装でいなくてはいけないという規定はない。ただ、こういう車の客を相手の店だから、見た眼にきびきびした印象を与える服装でなくてはいけない。

彼の責任はこのドライヴ・インだけに限られているが、真向いに同じ会社から出しているガソリン・スタンドがある。そっちが先からある。(近雄の会社は、千葉の銀座通りで古くからレストラン上総(かずさ)を経営しているほか、新しい駅ビルや駅の横のショッピング・センターに支店を出している。また会社や工場の給食も引受けていて、近雄はドライヴ・インへ来るまでは、四年間、ずっと給食の方で働いていた。それらは食品部門であるが、まだこの他に石油、プロパン・ガスの販売もやっている)

向いのスタンドには、館山から通って来る主任の青木さんのほかに若い者がもう一人いるが、夜、二人が帰ったあとは近雄が管理を任せられている。

もともと近雄は車が好きで、自分でいろいろいじってみたい方なので(いまは中古のオースチンを持っている)、昼間でもよくスタンドの方へ行って、お客の車にガソリンを入れたり、オイルを

入れたりして、手伝っていた。
そういう仕事をするにもこの服は丁度、ぴったりである。
スタンドといえば、四月の初め、まだここへ来て間のない頃であったが、夜、近雄がスタンドにいると、小さな子供を三人乗せた夫婦者の客が車をとめて、金谷まで釣りに来たが、一緒に向うを出た妹夫婦の車を途中で見失ってしまったといった。
金谷からこちらは一本道で、道を間違える筈がないのだが、心配そうな様子なので、
「それでは、私がひとっ走り、行って見て来ましょう。きっと後から来ますよ」
といったが、その奥さんが抱いているいちばん下の子は、まだ一年になるかならないかの赤ん坊で、可哀そうにすっかりくたびれて、眠っている。
「よかったら、狭苦しいところですが、畳の上がいいでしょう。その間、こちらで皆さん、休んでいて下さい」
そういって、近雄は道を見張っている主人を残して、あとの家族をスタンドの横にある家へ案内した。家といっても、もともとこのガソリン・スタンドの附属の倉庫であったのを、近雄が女房子供を連れて赴任することになったので、会社の方で急いで大工を入れ、即席の住宅に改造した代物である。
トタン屋根のひと間きりの家で、窓なんかもあとからつけたので、硝子戸だけ入っていて、雨戸がない。そういう家であるが、休憩してもらうために、はぐれた家族の人に上ってもらった。
近雄のところにも、去年の六月に千葉の大森町のアパートで生れた女の赤ん坊がいる。蒲団の中で眠っていたが、お客さんが大勢入って来たので、眼をさまして泣き出した。
すると、夫婦者の連れている二番目の男の子が、好子（近雄のうちの赤ん坊）を笑わせようとし

て、畳の上ででんぐり返りをやった。好子が笑った。
「ここへどうぞ、赤ちゃんを寝かせて下さい」
そういって、同じ蒲団に寝てもらった。
「どうも済みませんね。せっかくよくやすんでられたのに、起してしまって」
奥さんが気の毒がった。
「いいえ、いいんです」
女房の照代は口下手な方で、あまりお愛想はいえない。だが、上総のウェイトレスをしていた時分から、気だてがいいので、朋輩にはみんなに好かれていた。二人が一緒になったのは四年前のことで、近雄が二十一で、照代は十九であった。
「この子は」
と奥さんがいった。
「今度、幼稚園へ入るんです。こっちは小学一年です。明日、入学式なんです」
それから近雄は自分のオースチンに主人を乗せて、街道をひとっ走り、様子を見に行ったが、どこにも連れの車は見当らず、事故を起したらしい気配もなかった。
多分、向うが先へ行ったのに気が附かず、あとから来ないので心配しているとしか考えられなかった。その夫婦者は何度も礼をいって、帰って行った。
暫くたってから、ドライヴ・イン宛にクッキーの箱が一箱、送られて来た。初めはいったい何のことか分らなかったが、照代が、
「ちかちゃん、あの晩の人じゃないの」
といったので、やっと分った。

車の中で聞いた話では、浅草の方で楽器の製造と卸しをやっているということであったが、下町育ちの人らしく、気さくな夫婦であった。

楽器屋さんと分ったので、話が弾んだ。近雄は市役所の食堂にいる時分、仕事の合間に素人ばかり集めてバンドをつくって、辰巳団地にあったあきホールを借りて、毎晩九時ごろから二時ごろまで練習をやっていたことがある。一時はかなり凝った。

近雄にスチール・ギターを教えてくれた友達は、いま千葉のダンス・ホールでバンド・マスターをしている。

「何の楽器ですか」

近雄が勢い込んで聞くと、その人は、

「ラッパです」

と答えた。

「サックスとかトランペットですか」

「ええ、そうです」

お父さんの代からの商売で、つくった楽器は放送局へ入れているといっていた。

いま、近雄が立っているうしろの壁に、

「天ぷら定食二百円」

と書いた貼紙がしてあって、その横に、みそ汁つき、と括弧に入れて書き添えてある。

少し離れたところに、

「えび、はぜ、あなご、ぎんぽ、きす、めごち。生鮮地魚、お好み天ぷら」

と別の貼紙がある。
ドライヴ・インというのは、通り一遍のお客さんだから、どうしても通り一遍の商売になりがちである。中には取れるだけ取ってやれというので、売っている物にいい加減な値段をつける店もある。
そんなことはしたくない。たとえ通り一遍のお客さんであっても、こちらは出来るだけ努めなくてはいけない。出て行く時に、
「今度、いつ来るか分らないが、来たらこの店に寄ってやろう」
と思わせるようにしたい。
それには親切で素早いサーヴィスはいうまでもないことだが、何かこのドライヴ・インの特色を出すようにしなくてはいけない。
それで近雄が思いついたのが、この天ぷらと天ぷら定食であった。
地理的にいうと、東京から金谷や館山方面へ出かけて来る客には、この木更津あたりが中休みをするのに丁度、手頃な位置にある。駐車場を出来るだけゆったり取ったのもよかった。
ところが、海岸を走っている街道でありながら、このドライヴ・インは海が見えない。すぐ眼の先に海がひろがっていて、潮風が吹きつけて来るという場所なら、黙っていても観光バスがとまってくれ、ドライヴや海水浴の客が休憩してくれるかも知れないが、ここはそうはゆかない。
ただの町外れである。前もうしろも田圃で、遠くに低い丘陵が見えるだけであった。景色としてむしろ平凡に過ぎるといってもいい。
しかし、それで諦める手はない。海は見えないけれども、海の近くだということはお客さんは知っている。ましてこの木更津の海は簀立ての名所である。ここから先、富浦湾から館山へかけて内

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com